円環の変貌 上

Les métamorphoses du cercle

ジョルジュ・プーレ

岡 三郎訳

国文社

円環の変貌 上

Les métamorphoses du cercle

ジョルジュ・プーレ

岡 三郎訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

国文社

訳者略歴

岡　三郎（おか　さぶろう）

1929年生まれ。青山学院大学大学院文学研究科修士課程修了。現在青山学院大学文学部教授。文学博士。
《著書》『増補 凝視と夢想——ワーズワス論』,『ワーズワス『序曲』論集』（共著），『夏目漱石研究』第一・二巻。
《訳書》『ワーズワス・序曲』，エリアーデ『神話と夢想と秘儀』，カッシーラー『言語と神話』，スコフィールド『ハムレットの亡霊——『ハムレット』と現代文学』，ジャン・パリス『ハムレット』（共訳）ほか。

円環の変貌　上

1990年6月15日　初版第1刷発行

著　者　ジョルジュ・プーレ

訳　者　岡　三郎

発行者　前島　俶

発行所　国 文 社

東京都豊島区南池袋1-17-3（〒171）

電話03(987)2865 振替東京8-195058

印刷 新栄堂／製本 石津製本

エルサに

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

はしがき

円環以上に《完成した》形は存在しない。またこれほど持続的な形もほかに存在しない。ユークリッドが記述している円環と現代数学が描きだすそれとは、たんに似ているだけでなく、合致している。時計の文字盤、運命の車輪といったものは、それらが記録し、あるいは決定してゆくさまざまな変化によって修正されることなく、損われることなく、時間を貫通している。精神は、ひろがりを表現しようとするときには必ず、同じ中心点のまわりに同じような曲線をうごかしてゆく。コンパスの脚のひらき具合いはいろいろあるにしても、あらゆる時代の人間はじつにただひとつのコンパスしか使用していないのだ。

したがって円環という形は、それによってわれわれが自分たち自身のいる精神的ないし現実的な場所を描き出し、われわれをとり巻いているもの、ないしはわれわれ自身がとり巻いているものを位置づけることができるようになる種々の形のうちで、もっとも恒常的なものである。その簡潔さ、その完璧さ、その絶えざる普遍的な適応のゆえに、円環は、あらゆる信仰の根底に見出される種々の特権的な形象のうちで、もっとも重要なものとされている。そのような種々の形象については美術史家のフォシーヨンが次のように書いている。《ある力強い厳格さで限定され、しかもあるきわめて堅い物質で鋳造されたようなこれらの形象は、

時間によって何ら影響されることなく、その時間のなかに貫通している。》さらに彼はこう付け加えている。《変化しうるものとは、そうした形象のなかに様々に変化した内容を注ぎこむ幾世代にもわたる人々によって読みとられるその仕方である。》

したがって《円環の変貌》とは、ここでは定義上変貌しえないような形象の変貌ではなくて、その形象がたえず人間の精神において適合してきたさまざまな意味の変化として理解しなければならない。こうした意味のさまざまな変化は、人間存在が、自分たちのうちのもっとも内奥にあるもの、すなわち内的なものや外的世界との彼らの関連についての感覚、空間と時間的持続についての彼らの意識を、みずからに表現してみせるその仕方のうちに照応して現われるところのさまざまな変化と合致している。このように平行して現われる変貌のいくつかをたどることが本書の目的である。明らかに幾何学にならって書かれた書物であるが、それはまったく主観的な幾何学によるものである。

円環の変貌　上巻　目次

はしがき……5
序　論……11
第一章　ルネサンス……39
第二章　バロック時代……65
第三章　パスカル……95
第四章　十八世紀……123
第五章　ルソー……154
第六章　ロマン主義……187
第七章　ラマルティーヌ……230
第八章　バルザック……261
第九章　ヴィニ……291
第十章　ネルヴァル……306
原　註……334

〈下巻　目次〉

第十一章　エドガー・ポウ
第十二章　アミエル
第十三章　フローベール
第十四章　ボードレール
第十五章　マラルメの《プローズ》
第十六章　ヘンリー・ジェイムズ
第十七章　クローデル
第十八章　三人の詩人
　Ⅰ　リルケ
　Ⅱ　T・S・エリオット
　Ⅲ　ホルヘ・ギリエン
原　註
訳者あとがき
索　引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

円環の変貌　上

序論

数世紀のあいだ、神学者や哲学者の思想のみならず、詩人の想像力においても重要な役割をはたしてきた、神についての有名な定義がある。すなわちそれは、Deus est sphæra cujus centrum ubique, circumferentia nusquam. つまり、神とは中心が至るところにあるが円周はどこにもない一個の球体である、という定義である。

この文章が初めて現われてくるのは、『二十四人の哲学者の書』という十二世紀の偽ヘルメス文書の写本においてである。(註1) それは神についての二十四の定義がそれと同数の神学の大家たちによって与えられたもののうちのひとつである。この神学者たち自身の名前はこの書物の著者と同じように匿名のままになっている。その二十四の定義は互いにその連関を把握しなければならないような順序で続いている。とりわけ最初の三つの定義はもっとも緊密に関連している。その第一のものはこうなっている。Deus est monas monadem gignens et in se reflectens suum ardorem. つまり神はモナドを生みかつ自分の熱を自己のうちに反射している一個のモナドである。第二の定義が、神はその中心が至るところにあり、かつ円周はどこにも存在しないような球体であるというものである。第三の定義は次のようになっている。Deus est totus in quolibet

sui. すなわち神はそのいかなる部分においても完璧なものである。

これら三つの命題を結び合わせている絆をわれわれは確かめることができる。もし神が父として息子である彼自身の似姿を生みだすならば、神にこのような神の似姿をつくらせた愛は、同一の神に再びその似姿を返上する。父は自分の姿をその息子のなかに反映し、息子は自分の姿をその父のなかに反映する、そしてこうした愛の相互性は聖霊という三位一体のうちの第三のもの以外の何ものでもない。そのサイクルは完璧なものである。これらの三者を結合する無限の活動は巨大な球体を構成し、そのすべての点上で同一の充足性が見出されるものである。円周というものがないこの神聖な球体において、あらゆる点は他のすべての点と同一であり、あらゆる瞬間は他のすべての瞬間と同一である。神は、人々が考える神の存在ないしその実在のどの部分においても完全に神そのものである。あるいはさらに正確に言えば、神においては部分というものはまったくなく、時間的な瞬間の連続もなく、ただ絶対的な単一性と絶対的な同時性があるだけである。したがって、神においては円周の巨大さが中心点のもつ統一性のうちに再び見出されるということ、あるいは神の存在の全体性は人々が神のうちに勝手に識別しようとする時間ないし空間のどの部分のうちにも現存しているということは正しい。

言いかえれば、無限大の球体は神的な巨大さの表象として解釈することができよう。しかしまた同時に、永遠という神の別の属性の表象としても解釈することができる。この見地からすれば、それは永遠についてのもうひとつ別の有名な定義であるボエティウスの次のような定義の隠喩的な転換以外の何ものでない。Æternitas est interminabilis vitae tota simul et perfecta possessio. すなわち永遠とはきわまりない実在をまったく同時にしかも完全に所有することである。(註2)

永遠をこのように定義する場合、ボエティウスは連綿として続く哲学者たちの言葉を反復する以外のことはしていなかった。その哲学者たちとは、(一個の球形によって表現されている)絶対的存在について、それは《全体的に現存している》[註3]ものであると断言しているパルメニデスから、永遠とは彼にとっては《すべての線が統合される一点のように……その同一性を保ちつつ、つねにその全体において現存している一個の生命》[註4]であるようなプロティノスに及んでいる。永遠についての定義は、神聖な生命だけが和解させることができるような矛盾した二個の言葉と二個の概念をつねに結合させている。すなわち omou pan, totum simul, trestout ensemble, insieme tutto, allemittenander, altogether at once であり、これらの言葉のあるものは時間的な全体性を、また逆に他の言葉は時間の欠如つまり瞬間性を表現している。永遠とは Nunc Stans [停止せる現在(いま)] であり、永遠の瞬間であり、持続のたんなる一点であるが、しかし、そこにおいてこの持続の範囲内のすべての点が現存し結合するような一点である。

永遠のこのような二重性は、聖ボナウェントゥラによって、『二十四人の哲学者の書』の定義と同様にボエティウスの定義にも関連しているあるテキストにおいて、次のように明確に解明されている。

もし人が、永遠とはある無際限の実在を意味しているというならば、永遠という言葉の意味はそれによって尽くされるものではないと答えなければならない。なぜなら、この言葉は無際限性だけでなく、同時性も意味しているからである。そして無際限という様態によって、始まりもなく終りもないような知性によって知りうる一個の円周を意味し、また同時的であるという様態によって、中心の様態としての単一でかつ不可分であることを意味しなければならず、しかも、この二つの事柄が、神は単一でありかつ無限であるゆえに、神について同時に確認される。まさにそのように永遠における円形というものは理解されなければならない。[註5]

したがって永遠は、無限大の円周としてみれば持続の可能な限り巨大な円であり、またその円周の中心としてみれば固定した一点であり、単一の瞬間であり、この持続の円周上のあらゆる点と同時的に関連しているものである。

それゆえ、神聖な永遠性のもつこのような相反する二つの特質を念頭におこうとするものは、何らかの仕方で、自分の精神を二つの反対の方向に投げだしてゆかなければならない。想像力を際限なく拡げてゆかなければならない。またそれを極度に凝縮しなければならない。一切の持続を包含するような巨大な円周だけでなく、一切の持続を排除する中心点とも同一化してゆかねばならない。円周と中心とに同時的にたちむかわなければならないのだ。

ダンテの『神曲』のなかに表現されているのは、まさにこのような精神の二重の運動である。

「天国」篇の第十四歌のなかで、ダンテは次のようなイメージを用いている。

> 円い容器の中の水は外部または内部から打たれるに従って、波動は中心から縁へ、あるいはまた縁から中心へ及ぶものである。(註6)

容器のなかの水が、周辺にむかうとともに中心にむかっても波動するのと同じように、この詩人の魂は、一切の事物の中心にある神にむかうとともに、一切のものを包んでいる神にむかっている。ダンテ的な神が所有しているこのような絶対的中心と絶対的円周という二つの特徴は、最後には一個の円と点という形象をかりた神の至福のヴィジョンに達する一連の経路のなかによく表わされている。神は ii punto, A cui tutti

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com